

一葉亭四迷集

日本近代文学



日本近代文学大系 4

二葉亭四迷集

解説 田中保隆

注釈 畑 有三

安井亮平



角川書店

田中保隆（たなかやすたか）

明治44年（1911）岡山市に生まれる。昭和9年（1934）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現在聖心女子大学文学部教授。著書『夏日漱石』（昭43 明治書院），主要論文「二葉亭と自然主義」（『解釈と鑑賞』昭38・5），「『新思潮』と芥川龍之介」（昭44 講談『日本文学』第10巻所収），「夏日漱石—その美と倫理」（『国文学』昭45・6）。

畑 有三（はたゆうぞう）

昭和9年（1934）福岡市に生まれる。昭和31年（1956）東京大学文学部国文学科卒業。日本近代文学専攻。現在共立女子大学文芸学部助教授。主要論文「二葉亭四迷」（『日本文学』昭40・11 ほか），「『近代』文学の成立」（昭43 『日本文学の歴史』9所収），「門（夏日漱石）」（『国文学』昭44・4）。

安井亮平（やすいりょうへい）

昭和10年（1935）名古屋市に生まれる。昭和39年（1964）早稲田大学大学院露文学専攻。博士課程修了。ロシア思想史・日露交渉史専攻。現在早稲田大学文学部助教授。主要論文「ホミヤコフの『ロシアと西欧』観」（『日本ロシア文学会会報』第6号 昭38・8），「二葉亭のロシア人・ポーランド人との交渉」（『文学』昭41・8）。

日本近代文学大系 全60巻

第4巻 二葉亭四迷集

昭和46年3月10日 初版発行



別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所 株式会社 角川書店

注 釈 者 畑 有 三
安 井 亮 平
発 行 者 角 川 源 義
整 版 者 萩 森 匡
印 刷 者 中 村 武
製 本 者 鈴 木 俊 一

東京都千代田区富士見2-13-3
電話東京 (265) 7111<大代表>
振替東京 195203
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替いたします。

信教印刷・鈴木製本

目次

凡例

五

二葉亭四迷集解説

田中保隆
七

二葉亭四迷集注釈

浮雲

畑有三
七

平凡

畑有三
三

あひづき

安井亮平
三

めぐりあひ

安井亮平
三

小説総論

安井亮平
四

作家苦心談

畑 有 三 四九

補 注 四七

関係地図 三七

参考文献 四〇

年 譜 四九

注釈者あとがき 五〇

凡 例

一、本書には、『二葉亭四迷の小説「浮雲」「平凡」、翻訳「あひゞき」「めぐりあひ」、評論「小説総論」、談話筆記「作家苦心談」の六篇を収録した。

一、本書は、解説・作品本文・本文に関する注釈（頭注および補注）・参考文献・年譜をもって構成した。

一、作品本文の底本に関しては、左記のとおりである。

○「浮雲」は、『二葉亭四迷全集』第一巻（昭39・9 岩波書店刊）所収の本文を用いた。ただし、第一篇・第二篇については、初版本（明20・6、21・2、金港堂刊）を、第三篇については、初出雑誌「都の花」（明22、第一八―二二号）所収の本文で校合し、段落構成など異同の部分は初版本・初出雑誌に従った。

○「平凡」は、『二葉亭四迷全集』第四巻（昭39・12 岩波書店刊）所収の本文を用いた。なお、初版本（明41・3 文淵堂・如山堂刊）と校合した。

○「あひゞき」は、『二葉亭四迷全集』第一巻（前出）所収の本文を用いた。なお、初出雑誌「国民之友」（明21・7―8、第三巻三五・二七号）所収の本文と校合した。

○「めぐりあひ」は、『二葉亭四迷全集』第一巻（前出）所収の本文を用いた。なお、初出雑誌「都の花」（明21・10―22・1、第一巻二号―第二巻六号）所収の本文と校合した。

○「小説総論」は、『二葉亭四迷全集』第五巻（昭40・1 岩波書店刊）所収の本文を用いた。

○「作家苦心談」は、初出雑誌「新著月刊」（明30・5）所収の本文を用いた。

一、本文の表記は、底本に従った。ただし、明らかな誤植は改めた。なお、「浮雲」「平凡」「あひゞき」「めぐりあひ」の四篇は、全集版底本ではバラルビであるが、初出雑誌・初版本では総ルビで行なわれている。本書では、必要に応じて初出雑誌・初版本のルビを復活した。その場合は、（ ）に囲んで底本にはなかったことを示した。また、「小説総論」「作家苦心談」の二篇は読者の便宜のため、新たにルビを補った部分もある。その場合も（ ）で囲んで底本のものとは区別し、

かなづかいが旧かなづかいとした。

なお、「浮雲」については、次のような点を配慮している。

句読点は、第一篇・第二篇については全集版底本に従い、第三篇については、「都の花」の本文に従った。

会話文の場合、初出雑誌・初版本にみられる閉じかぎ（「」）の使用法に不統一があるので、全篇を通じて統一的に閉じかぎを入れた。

第三篇で頻出するその他の記号類（、？！）については、「都の花」の本文に従った。

一、注釈は頭注と補注から成る。頭注は本文に一、二、三……の番号を付した部分について施し、さらに必要と思われるものについては、これを補注で補った。本文の頭注番号は見開き二ページごとの通し番号となっている。

一、注釈の表記は、新字新かなによることを原則としたが、引用文ではかなづかいのみ原文のままとした。また、難読漢字の読みは（ ）に入れてその語の下に置いた。

一、注釈中の数字は、引用文を除き「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように表記した。ただし、年号を（ ）の中に入れる場合は洋数字により、（明³²・3）（大¹⁴・10）のように示し、明治以降の年号にかぎっては、それぞれ、明・大・昭と略記した。

一、注釈で各種文献から引用しまたは文献に言及する場合、単行本は『 』、新聞・雑誌および作品の題名・論文名などは「 」で示した。

一、注釈は、先行研究の成果をとりいれながら、作品の主題、発想、構成、文体、語法などにかかわる事項注に重点を置き、必要最小限の語釈を加えた。また原則として、頭注は、表現に密着しながら作品を客観的に鑑賞していくことを主とし、補注では、典拠の考証、作品の特色や背景・成立事情、先行研究の紹介・検討など作品論の領域に及んでいる。

一、巻末に『浮雲』関係地図を掲げ、鑑賞・研究の利用に供した。

一、なお、「小説総論」中とびら使用の插图（『中央学術雑誌』第二六号）は、昭和女子大学近代文庫所蔵のものを複写転載させていたものである。

解
說

二葉亭四迷集解説

田中保隆

生い立ち

二葉亭四迷本名長谷川辰之助は、明治改元の四年前、元治元年（一八六四）二月二十八日（太陽暦四月四日）、江戸市が谷台羽坂の尾張藩上屋敷の御長屋で生まれた。そこはのちに辰之助が入学を希望して果たさなかった陸軍士官学校の敷地となり、太平洋戦争後は極東軍事裁判の法廷、現在は陸上自衛隊市谷駐屯部隊になっている。父は尾張藩士長谷川吉数（通称岩蔵）、母は志津（お静）といった。吉数は尾張藩士水野茂三郎の子で、長谷川家へ養子に入っただが、文久二年（一八六二）六月、御鷹場吟味役（七石二人分取）を仰せつけられ、江戸上屋敷の定詰になった。志津は、長谷川家と同格の尾張藩士後藤卯右衛門の長女、江戸育ちで江戸風に仕込まれた娘であった。辰之助が生まれたとき、後年の壬申戸籍の記載が正確であるとすれば、吉数は数え年二七歳、志津は二四歳であった（辰之助出生の年月日については異説がある。ただし国木田独歩の場合などとは違って、その違いが出生の秘密にまで及ぶというのではないらしい）。尾張藩は徳川幕府の親藩であったが、藩主徳川慶恕（慶勝）は水戸の徳川斉昭・越前藩主松平慶永らと共に一橋派（慶喜擁立派）として幕府内反主流派を形成していた。慶勝は安政五年（一八五八）には幕府から「隠居・慎」の処罰を受けており、安政六年の大獄でも処罰されたが、このとき吉田松陰・頼三樹三郎・橋本左内らは死罪、梅田雲浜らは獄死している。辰之助出生の頃には、二百数十年太平を誇った江戸の町にも血なまぐさい風が吹きはじめていたのだが、しかし、そういう変革の予兆も、まだまだ七石二人分取の御鷹場吟味役の、ささやか

な家庭を脅かすには至らなかった。慶勝の謹慎処分も、文久二年一橋慶喜の將軍後見職就任に伴って、解けていたであろうから、尾張藩上屋敷に暗い影のさすことはなかったであろう。「御鷹場吟味役といふのは、いつも御鷹狩に伴する殿様のお気に入りとなる役であり、今日長谷川家に伝へられるところによると、吉数は美貌の持主であつたために、特にお小姓の列に加へられたといふことです。」(中村光夫『二葉亭四迷伝』)。

江戸の生活に馴れたこの若夫婦は、共に三味線をたしなみ、とくに志津は常磐津が上手であつた。一人息子の辰之助は早く夫を失つて寡婦となつていた祖母のみつに可愛がられていたが、後年、辰之助が西洋音楽をしりぞけ、邦楽を喜んだのは、こういう家庭で成長したせいもあつただろう。やがてしかし、京都を中心とする政局の動搖は、尾張藩上屋敷の平穩を破らずにはおかなかった。公武合体派の一人として、慶勝もうずまく政局の中に引き込まれていった。元治元年秋には第一次長州征討軍の總督に任命され、広島に出陣した。慶勝は、しかし、征長總督參謀西郷吉之助の策を入れ、戦戈をまじえずに撤兵した。慶応元年(一八六五)將軍家茂は、第二次征長軍の本營を大坂に張つたが、そのお膝元から物価騰貴を憤つた民衆の打ちこわしがはじまつた。それは忽ち江戸に波及し、尾張藩上屋敷の近く四谷でも米店や富商が襲撃された。政局はめまぐるしく變転するが、御長屋の長谷川吉数とその家族には、そういう枢機はわからない。ただ江戸の町々に立ちこめてきた不穩の空氣は、長谷川家の一人息子、わずか四歳の辰之助にも何とはなしに感じられた。あの奇妙な「ええじゃないか踊り」の乱舞は江戸から京坂神までの民衆をまきこんでいた。慶応三年一月九日の倒幕クーデターを助けるために、尾張藩も薩摩・土佐・芸州・越前の諸藩と皇居警衛に出兵した。二葉亭四迷は、のちに「酒余茶間」(明41)という談話筆記の中で、維新の騒ぎの記憶について語っている。尾張藩は官軍側として因州兵に藩邸を提供していた。辰之助は「だんぶくろに丁番に陣笠」姿の因州兵と仲よしになっていた。上野の彰義隊の戦争のときには、御長屋に残つていた藩士の家族たちは、枕元に非常用の包みを置いて寝ていた。「無人だから到底敵対は出来ない。もし切込まれたら逃げ出さう」というのであつた。切込んでくるのは幕府方のさむらいである。「毎時いふ実感論だが、慙く維新の動亂の空氣にも、稍実感的に触れてるので、それで一味ハイカラならざる或る(言はば豪傑趣味ともいふべき)もの、さては國家問題、政治問題の趣味などが僕等には浸み込んでゐるのさ。」――

明治元年一月、諸藩は江戸を引き払うことになった。才覚がきくので東京御留守居調役として残留することになった父

吉数と別れ、辰之助は祖母みつ・母志津に伴われて名古屋へ立った。母の実家後藤家に身を寄せて、辰之助は、野村秋足の漢学塾に通い、また母の弟後藤有常に漢文の素読を習った。一方、四年八月から翌年五月までは、洋学中心の名古屋藩学校に在籍、仏人教師からフランス語を習った。

東京に残留した吉数は、明治三年一二月名古屋藩史生準出仕、四年九月名古屋藩會計科心得をふりだしに、新政府治下の地方官吏の道を歩むことになった。辰之助は五年一〇月母・祖母らと共に東京に帰ったが、それから八年五月島根県に赴任する父に伴われて松江に赴くまでのことは不明である。おそらくしかるべき塾にでも通ったことと思われる。ついでにここで記しておく、吉数は、松江で一〇年四等属（月給四〇円）、一二年出納課長、一五年會計課長（月給四五円）としたいに昇進したが、一七年六月には福島県三等属に転任、一八年四月非職になった。下級地方官から年を経て中級地方官に昇進して退職したわけであるが、これは、特に藩閥や学閥のひきを持たない下級藩士からの転身者にとって、普通のコースであったといえよう。同じ尾張藩士からの転身組であった山田美妙の父は、吉数より数年前に赴任していたが、これは島根県警部長で吉数よりも上席であった。しかし、これとてそれ以上の昇進は望めなかった。中級地方官でもさうとう派手な遊びもしたらしく、二葉亭の長女片山せつは談話「父二葉亭とその周囲」（清水茂編『近代文学鑑賞講座・二葉亭四迷』所収）の中で、吉数は辰之助をつれてお茶屋に行き、辰之助（当時は数え年一四歳位？）は半玉と遊ばせ、自分は芸者と遊んでいたといい、また芸者に女の子を生ませたともいっている。一人息子の二葉亭もそのことを知っていて、のちに後妻のりうに「その妹がいてくれたらなあ」などと洩らしていたという。吉数が福島県筆頭収税属を非職になったのは四八歳であった。これは老齢による勇退とはいえないので、あるいは一八年から一九年にかけて実施された大行政整理に関係があったのかもしれない。一八年一二月、政府は大政官制を廃止して内閣制度を設けたが、これは君主制的官僚政治確立の意味を持つものであり、これを契機として財政緊縮のためと反政府的ないしは非能率的な官吏の排除のために、大量の首切りを行なった。吉数の非職が、こういう政策の末端への現われであったとすると、その後、まもなく二葉亭が、『浮雲』を主人公内海文三の免職を前提として構想したことの必然性が、友人らの免職の事実も考え合わせて、了解される。

漢学塾

明治八年五月、父吉数に従って松江に赴いた辰之助は、六月内村友輔（鱸香）の相長舎に入って漢学を学ぶことになった。内村鱸香は文政四年（一八二二）、松江の油商（のち酒造業兼営）の三男に生まれ、二四歳のとき京に上って貫名海屋の門に入り、さらに大坂の篠崎小竹の梅花塾に学んで、篠門四天王のひとつといわれた。のち、江戸の安積良斎の門に入ったが、良斎はその学才に感じ、松江藩士と称して昌平黌に推薦した。鱸香は昌平黌で四年間苦学し、学究としても一流の域に達したが、単なる儒者ではなく、志士たちと交り結び、熱烈な勤王攘夷思想を抱懐していた。維新の動乱の際、松江藩が去執に迷っていたとき、勤王に踏み切らせたのは鱸香であったといわれている。明治七年相長舎を興してから、後期水戸学の代表者会沢正志斎の「新論」、藤田東湖の「弘道館記述義」などを好んで講じていた。辰之助は鱸香を通して後期水戸学を知り、さらに吉田松陰の存在を知った。幼いときからの漢学学習で、辰之助は朱子学にはすでに触れていたに相違ないが、朱子学は窮極原理としての「理」と形而下的な「氣」を説き、「理」が物の性を決定し、「氣」が物の形態を定めるとした。朱子学では「理」は絶対の静であるとされたが、後期水戸学派はこれを消極的な寂滅主義であるとしてしりぞけ、「天地は活物にして、人も亦活物なり」（会沢正志斎「新論」）として、不断の変化の中にある人間の、積極的な実践的な生き方を強調した。後期水戸学派は維新運動の火つけ役を果たしたが、しかし、幕藩体制を国体秩序の中で正当化していたところに限界があった。この限界を、日本神話を引いて独断的熱狂的に乗り越えようとしたのが吉田松陰であった。松陰は幕藩体制を否定して、「日嗣」（天皇）と「億兆」（人民）とを直結した。これによって、従来の尊王攘夷運動が持っていた敬慕思想は否定され、倒幕的方向が明らかにされたのであるが、松陰が途中で仆れたことは、彼の生涯を「士丈夫の志」で貫かせることになった。維新の空気をじかに肌感じていた少年辰之助が、松陰に強い感銘を受けたのは当然であろう。しかし松陰の論理からみれば、明治新政府の存在を果たして正当化できるかどうか。数え年一二歳の辰之助が相長舎に入塾する一月ほど前に、榎本武揚公使によって千島・樺太交換条約が、露都で調印されていた。相長舎の中に屈辱外交非難の聲が盛んであったことは想像するまでもなからう。辰之助はそういう雰囲気に触れて、心中ナショナリズムの昂揚を感じたに違いないが、しかし、新政

府の存在を考えるには、まだ何年かの歳月が必要であった。

辰之助は、相長舎に通うと共に、九年三月からは教員伝習校（のちの島根県師範学校）の変則中学科（明10・11松江中学になる）に入学した。伊沢元美「二葉亭四迷と内村鰭香」（昭40・2「島根大学論集」）によれば、辰之助は英語を中心とする普通学を修めたようである。鰭香はここでも漢学を教えていた。名古屋時代にもそうであったが、辰之助は漢学と並行して、洋学を学んでいた。

辰之助は明治一一年三月上旬、祖母みつと共に四谷左門町に住み、五月から一〇月まで森川塾に通って代数学を学んだ。辰之助は変則中学科在学中から数学が不得意であった。このことは、『平凡』の中に取り入れられている。『平凡』の主人公は両親の反対を押して上京したことになるが、辰之助の場合はおそらく父吉数の計らいだったと思われる。吉数のような転身組は、新時代への適応能力が少なく、出世の道が閉ざされていることを痛感していた。彼等の多くはその子弟を正規の学校へ進めることに熱心であった。辰之助は陸軍士官学校（明治一二年開校）の入学試験を受けた。帝政ロシアの侵略政策は、千島・樺太交換条約らしい彼の念頭から去らなかつた。それは日本民族の興亡に関することであり、「維新の志士」肌の彼は黙視することができなかった。辰之助は明治一一、一二、一三年と三回も陸士を受験している。はじめ二回は学科試験でふり落され、あと一回は学科は通ったが身体検査で落されたのであろう（稲垣達郎「二葉亭と優等生」へ前出『近代文学鑑賞講座・二葉亭四迷』所収を参照）。辰之助は強度の近視眼であったから、おそらくそのために不合格になったと思われる。それにしても成義塾や再度森川塾で数学を学びながら三回も受験を繰り返したのは、国士的な気持ちから出ただけではなく、陸軍士官学校が給費制度であったからでもあろう。彼は一二年二月から一〇月まで漢学塾済美塾に在学したが、その頃将来のロシア公使を以て自ら任じていたことからみて、あながち陸士にだけ執着していたとは思われない。

済美塾在学は短期間ではあったが、ここでの学習は、相長舎と共に彼の生涯に大きな影響を与えた。塾主の高谷衷（龍洲）は豊前中津藩士の家に生まれ、一時は異色の儒学者帆足万里に学んだ。好んで『日本外史』を講述する一方「万国公法蠡管」を訳述するという、帆足門下らしい勤王漢学者であった（私は、帆足万里が莊子に傾倒したことのある学者であることから、辰之助はここで高谷龍洲を通じて莊子を知ったのではないかと想像している。それがのちの二葉亭の思想に影響しているように思われる）。十川信介「二葉亭四迷における『正直』の成立」（昭39・8「国語国文」）によると、済美塾では「毎日忠臣義士の言行を説き、毎

週必ず撃劍の練習をした」という。土屋大夢「卅年前の長谷川君」(明42・5・16「東京朝日」)には、明治一一年大久保利通を暗殺した刺客の一人杉村文一も塾生であったが、多くの塾生が杉村を支持したらしいことが述べられている。長谷川辰之助は、慷慨家ではあったが乱暴書生ではなく、「神經家にして気骨を帯べる面白き人」であったともいっている。辰之助と同時に中江篤介(兆民)・西源四郎(のち外交官)などが在塾した。十川信介の前出論文によれば、塾誌「奎運鳴盛録」には中江兆民の「民権」「原政」等、高谷桂堂(龍洲の長子)の「共和政治論」「民権論」、黒川言敏「西郷隆盛」(隆盛支持論)などが載っていた。辰之助は、一二年一〇月刊の「内外交際新誌」を愛読していたが、そこにはロシアの侵略政策を非難する評論が出ていた。二葉亭は「予が半生の懺悔」で、「私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向——維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して来て、即ち、慷慨愛国といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其の結果、将来日本の深憂大患となるのはロシアに極つてゐる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきゃいかんわい——それにはロシア語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして外国語学校の露語科に入学することゝなつた」と語っている。

外語時代

辰之助は明治一四年五月、東京外国語学校露語科に給費生として入学を許可された。当時の露語科では、ロシアの中学校と同じ課程をロシア語で教授しており、その教科は地歴・数学などの普通学からはじまって修辭学やロシア文学史に及んでいた。ロシア文学史の授業は、受持教師のニコライ・グレーが主要作品を朗読して聞かせ、そのあとで生徒が作中人物の性格批評をロシア語で書いて出すというやり方で行なわれていた。グレーの朗読は非常にうまく、聞きほれないものはいないというほどの名調子であった。辰之助が外語で修得した科目は、明治三四年頃執筆したといわれる「経歴書」(草稿)に列記してある。法律関係では欧洲憲法(当時日本にはもちろん憲法はなかった)から国際公法、刑法、行政法、民法、商法等、経済学、財政学、露文学では文学史、審美学、叙事詩・叙情詩・劇詩の分析および批評などがあげられている(なお、この「経歴書」で注目すべきことは、一六年二月一日から一八年二月二十五日まで専修学校で法律一班、経済学全科を修めた旨、鉛筆で書き加えてあるということである。専修学校というのはたぶん現在の専修大学の前身の学校のことであろう。当時夜間の法制経済専門の学校として有名であ

った。これが事実とすると辰之助は外語二年生の終わり頃から五年生の冬——退学の直前——まで法経専門の夜学に通っていたことになる。後年彼が示したロシア事情の調査分析の能力、また実業への関心は、この頃から養われていたことになり、外語時代の彼の関心の方向が推測される。

外語時代の辰之助の勉強ぶりは有名である。成績も極めて優秀で、生徒、教師らから尊敬されていた（大田黒重五郎「種々なる思ひ出」明42・6「新小説」、稲垣達郎「二葉亭と優等生」参照）。当時の露語科教授陣の主体はロシア人で、主任教授メニコフは、有名な細菌学者メチニコフの兄、イタリア独立戦争に参加して片脚を失ったという経歴の人で、晩年にはスイスの大学で比較地理学を講じていた。中村光夫の推測によればスイス国籍の亡命者であったろうという（『二葉亭四迷伝』）。直接辰之助たちの薫陶に当ったニコライ・グレーも帝政ロシアからの亡命者で、国籍はアメリカであった。教壇からはばかりとこなくロシアの専制政治を攻撃したといわれる。帝政ロシアの侵略政策に憤激して外語に入ってきた辰之助は、はじめは立場が違っていたが、グレーの専制ロシア攻撃にスムーズに共感することができたであろう。グレーへの共感はいかに彼の目を開かせ、「志士」氣質の陥りやすい狷介独断から彼を救ってくれた。後年、ロシア文学から社会主義を学んだといっている（『予が半生の懺悔』『余の思想史』）が、それはロシア文学を反専制主義の立場から解明したグレーの情熱に負うところが大きかったに違いない。グレーはブーシュキン、ゴーゴリ、レルモントフ、トルストイ、ツルゲーネフ、ゴンチャロフその他当時のロシア現代作家の多数を取りあげたらしく、辰之助はしだいにロシア文学への興味を強めていった。「する中に、知らず識らず文学の影響を受けて来た。尤もそれには無論下地があつたので、いはば、子供の時からある一種の芸術上の趣味が、露文学に依つて油をさゝれて自然に発展して来た」（『予が半生の懺悔』）であった。ここで二葉亭が「一種の芸術上の趣味」といつているのは、たとえば彼の好んだ江戸俗曲のように、江戸下町の庶民的情操に裏打ちされているものであった。坪内逍遙のいうように「江戸式しかも何方かと言へば下町式」のものであった。彼は、すでに見てきたように漢学に造詣が深かったが、それは彼の思想的基盤や儒教的なりゴリズムあるいはまた「志士」的傾向を育てるには役立ったが、直接創作への意欲を刺激するものにはならなかった。漢詩の朗吟は青年時代に好んだようであるが、自ら漢詩文を作るといふことはあまりしなかった。その点少年時代から漢詩文に親しみ、自ら創作に熱中した漱石などとは趣を異にしていた。二葉亭は、のちに創作の筆をとるようになったときも、なるべく漢詩文の影響を排除し、最も庶民的な文体で「人間の生況」を写